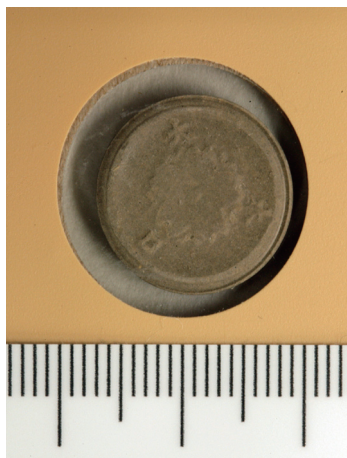


物資の欠乏（陶貨）



* 藤田家資料1「陶貨造幣計画一件」

解説

太平洋戦争末期となると、生活必需品をはじめとする物資が極度に不足しました。とりわけ金属の不足が顕著で、寺院の鐘、銅像、刀剣類などが供出されました。当時、金属製の貨幣の代用として計画されたのが陶貨です。写真左はその一件綴りで、陶貨の製造に至るまでの過程や委員会の協議内容、試作の様子、工場の施設概要等が記してあります。

これによると、非金属貨幣の研究は、アルミニウムおよび錫の供給が逼迫してきた1944（昭和19）年1月ごろから造幣局で進められました。様々な材質の研究が行われた結果、粘土および長石を主材とする陶貨が最良であるとされ、さらに（1）原料の土および石が多量に産出すること、（2）適正な焼成のための石炭の消費が少ないこと、（3）陶貨の色が均一に得られる技術を有すること、（4）着色材が豊富に手に入ること、などの諸条件から、京都・瀬戸・有田の民間業者に委託して製造することになりました。京都工場で1銭陶貨および10銭陶貨300万枚、瀬戸工場で1銭陶貨および5銭陶貨200万枚、有田工場で1銭陶貨100万枚の日産目標がたてられました。

しかし、終戦によりこの陶貨は世に出ることはありませんでした。

* 戦争末期の耐乏生活に関する資料として「衣料切符」（一般郷土史料1094）、「衣料切符制早わかり」（吉田家文書（上関町）追加12）などがあります。